

時は昭和十九年一月二十四日、莊里口の戦闘であった。その後も地域の警備に当たり、昭和二十一年四月一日復員した。

現地兵生還者三名だけであった。

北支から中支へ勝部隊 独歩第八 十五大隊の戦闘

山形県 小山田 庄三郎

―出身は山形県の何処ですか、また戦地は何処へ行
かれましたか。

私は山形県東根市（現）で、大正十一年十一月三日
生れで、昭和十七年徴集、甲種合格でした。

昭和十七年十二月一日、東部第二部隊（近衛歩兵）
へ入営。一週間程いて十二月七日夜、東京品川駅を出
発。釜山、朝鮮經由、満州―山海関―北支というわけ
です。

私たちは勝兵団の独立歩兵第八十五大隊要員だった

わけです。旅団司令部は汾陽にあったとのことですが、
我が大隊は靈石のそばの東村鎮という所に駐屯してい
ました。第六十九師団司令部は臨汾にありました。

内地での教育はなかったので、我々初年兵は東村鎮
で教育を受けたのです。とにかく、北支の冬の真盛り、
気温は零下三〇度近い。二八度ぐらいで、直接銃に触
れると、指がくっついてしまうので手袋をしなければ
ならない。息を吹っかけて温度を上げてからでないと、
銃から手が離れない。

一期の教育は、内地の倍の六ヵ月。この間ピンタも
張られたが、戦地で自分の命を助けるために止むを得
なかったと思っている。初年兵は第八十五大隊に五〇
〇名ぐらい入ったというが、大隊の兵員が、一六〇〇
名とのことだから、三分の一の古参兵が内地へ帰った
らしい。初年兵の中には朝鮮から四五名入った。我々
との人間関係は悪くなかった。彼等は朝鮮で教育を受
けて一緒になったが、頭脳は良く、体力もあり、優秀
だった。

教育中は討伐には出ないが、当時の想い出は、教官

に憲兵を志願しないかと言われたことである。私は軽機関銃だったので「軽機が可愛いから」と断った。教官は、私に話をする前に、故郷の家へ連絡をしてあり、「お前の家の方では、父親から教官に委せるという返事が来ている」と教官に言われた。しかし、私は、十一年式軽機の引鉄の引き方、突込みのしないコツ等、覚えるのに苦勞していたので愛着があつたから断つたわけだった。

一期の教育が終了してからの行動はどうしたか。軽機関銃一筋で進んだのですか。

検閲が終わって我々初年兵は各中小隊に配属されたのですが、その時は警備が主で、分隊長は伍長だった。私は、昭和十八年九月二十六日から射手になったが、それまでは弾薬手（三番）だった。

討伐は二個小隊ぐらいで出勤するが、一カ月に一回ぐらい各分遣地からの連絡で出る。その時は重機関銃一個小隊が配属になる。最初の討伐の時は、弾の音の見分けがつかず、弾の音も初めは、どれが速く、どの音が近いのか分からなかったが、段々と慣れてくる。

第二回目が、小善畔の戦闘です。昭和十八年九月十一日から十月十五日まで、これを「モ号作戦」と言った。中隊長は早野中尉、小隊長山田少尉、分隊長上村軍曹で、十月五日、小善畔の敵を、我が第八十五大隊全員の目前で第二小隊が攻撃を命ぜられた。

敵は小高い丘から小銃と手榴弾で応戦して来た。我が隊は手榴弾投下位置まで進む。その間大隊より重機関銃援護射撃を受け「どうだ、ここが命の捨て所だぞ」と前進した。

朝の七時三十分、私が小銃弾を受け負傷したのです。「右肩鎖骨下貫通銃創」だったので、その時、教官だった西部副官が私に「歩くのが大変だろう」と、自分の乗馬を貸してくれて「後方へ下れ」と言われた。私は馬に乗ったことがないので手綱が持てず、ことに負傷で右手がきかず、馬の首につかまったが、どうにもならず馬を返した。

軍医に見て貰い、本部の衛生班へ行ったら負傷者ばかり集まっていた。この戦闘では二〇人ぐらい負傷したというが、その時はそこに五、六人いました。

この作戦の敵は何千といいたので、こちらも山砲が出て、向うは迫撃砲だった。雨霰の如く、という言葉通り、弾丸が来ましたし、近接戦では手榴弾を投げてくる。しかし、先に進む人ほど手榴弾にやられないことが判った。敵は無鉄砲に射って来る。狙うというより、やたらに射つ、文字通り雨霰。その時は指揮官はやらなかった。戦闘中八路军に切りつけ軍刀を折ったと聞いたが。

その戦闘で初めて「天皇陛下万歳」を三回唱えて、庄内の難波上等兵が戦死した。この耳ではっきり聞いた。その後私は、初年兵教育の助手をしていて戦闘に参加しなかった。

昭和十九年の五月頃、京漢戦、河南作戦が北支ではあったのですが、大陸打通作戦の前段でした。

六十九師団（勝兵团）はこの戦闘に参加したのですか。

河南作戦は、昭和十九年五月五日でした。黄河の渡河は七日です。洛陽の西の方、新安の鉄道まで行き、西へ進んでいった。五月十三日、雲夢山の戦闘となっ

た。西村中佐が大隊長となった。中隊は第一線となつて、敵と至近距離で交戦した。洛陽の方から正規軍が来て、西安の方へ逃げるのと遭遇した戦いだった。

この戦闘で、軽機関銃の射手の小山と、弾薬手の矢萩が戦死した。私の小隊は戦死、戦傷で半数になってしまったということで、河南作戦は大変だった。私自身は雲焚山の戦いで運良く敵と会わなかった。

その後が秦嶺山の戦いだったが、夜の七時頃から戦闘開始、私と安藤上等兵は、小隊長から「軽機の射手と弾薬手は残れ」と言われ、後の隊員は前進した。三〇〇メートルぐらい前進して、背のうを置いて、敵と遭遇し戦闘となつて、戦死、戦傷が二六名出た。その時、鈴木第二小隊長は戦死したが、なお戦い続けた。余りにもひどい戦いだったので鉄帽で穴を掘って戦っていた。射手の私と安藤弾薬手は、小隊に続いて行ったが、半数以上が戦死していた。二人は十字銃、円匙を全部背負って持っていたので、小隊長は喜ばれた。

敵が退却するまで戦っていた。戦闘が終わって戦死

者の腕を切つて、死体をその場に埋め、腕を火葬し遺骨にし、戦闘中白布で包んで、小隊毎に持つて、戦つたり行軍したりした。

二回の戦闘で、中隊の戦力がなくなつて、大隊本部の所へ夜中帰つたが、敵とさらに遭遇し山の中へ入り、その後、隊は戦闘能力を無くして朝を待つたら、旅団から連絡が来た。それまでは、皆自爆を覚悟して手榴弾の栓を抜いていた。

險山廟（ニヤンニヤン山と称した）の戦闘は大軍に出会い、そこから退却して、黄河の曲がり角、潼関の西へ行き、西安までで行けなかつた。その後は上海付近に移つて、終戦を迎え、昭和二十一年一月二十一日帰国した。

勝 部 隊 河南作戦で負傷

岩手県 湯 上 弘

―湯上さんも郷土部隊の弘前師団編成の勝兵団との

ことですが、やはり北支方面でしたか。

私は大正十年一月六日、現在の岩手県江刺市で生れましたから、昭和十六年徴集第一補充兵でした。昭和十七年四月に盛岡補充部隊へ教育召集を受け、十月に解除になった。

ところが、翌月再召集、勝部隊要員で、十日ぐらいいて、朝鮮經由で北支の洪洞の部隊に入りました。勝五二二八部隊（独立混成第十六旅団第六十九師団）独立歩兵第一一九大隊へ転属となつたのです。私は大隊砲隊に配属されて、大行作戦に直ぐ参加ですが、途中襲撃を受け、一〇人ぐらい戦死しました。

沁源に大隊本部があり、大隊長は赤星中佐だった。昭和十八年の正月までそこにいて砲監視をやつた。何しろ八路军の真只中だったので、抗日や厭戦ビラがどんどん撒かれた。その後は沁源の下流の降馬鎮で下車し、沁水に部隊本部が移つた。

その頃、部隊から二名が支那語（漢語）教育に選抜され、大原の司令部（第一軍）に行つた。北支方面軍の各部隊から各二名、半年間の教育です。午前中は各